

# 宗教における正常と異常

思索神学の観点より

石脇 慶總

ISHIWAKI Yoshifusa

## 序

小論で取り上げようとするのは、個々の新・新宗教に関する問題ではない。具体的な事実を確定するのは、思索神学の守備範囲外の問題だからである。思索神学の任務は、確定された神学的事実に対して、「信仰に導かれた理性」の検討を加え、これら事実の根拠をできるだけ明らかにすることである。このことは、宗教一般に関する事実についても当てはまるだろう。

以下では、イエスの「種まきの譬え話」(マルコ4:1-20; マタイ13:1-9; ルカ8:4-8)を手掛かりに、宗教・信仰における正常と異常の問題を考える。しかし、この譬え話を取り上げるのは、飽くまでも手掛かりとしてであって、この聖句について聖書学の立場から聖書釈義を行うのが小論の主旨ではない。

## 信仰とは

先ず、一般に信仰と呼ばれるものについて一言するが、よく知られているように信仰という言葉は、色々な意味で使われている。それ故、小論ではどんな意味で、信仰という言葉を使っているのかを先ず限定する必要があるが、あまり厳格に規定するとかえってわかり難くなるので、「神から授けられる特別な生命」というやや漠然とした意味で使うことにする。恵みとしての信仰である。また、小論は、キリスト教だけではなく、宗教一般について考えたので、「神から授けられる」という表現は、極めて柔軟に理解する。つまり、絶対超越神を立てない場合にも適切な修正を施した上で、恵みとしての信仰を対象とする。

さて、イエスの譬え話に戻ると、この譬え話によれば、信仰とは、天父が私たち一人一人に与えてくださる新しい生命の種子であると考

えることができよう。次に、この種子は、予め決められた特定の場所に播かれるのではなく、いわば、至る所に無造作に播かれているようである。ここから直ちに真の信仰は、カトリック教会の外にもある、と結論するのは早すぎるとしても、その可能性を否定するものではないといってもよいだろう。たまたま教会の垣根の外に落ちる種もあるかも知れない。現代の宗教・信仰を考えると、これは大切な点であろう。

譬え話のもっと重要な点は、天父の手を離れたとき、同じ種子(正しい信仰)であっても、受け取る側の条件に決定的に左右されると言う事実である。つまり荒れ地に落ちた場合と、豊かな土地に落ちた場合に違いのあることが述べられている。ここに神の恩寵の秘義がある。即ち、恩寵は、人間の側からの条件を一切前提としないで、一方的に無償で与えられると同時に、人間の側からの努力、成長をも効果的に許容する。この二つの互いに相反する事実がどの様に調和されるのか、大きな問題である。しかし、今はこの問題は、省略に従わざるをえない。とにかく、ここでは、恩寵の絶対的無償性は、一応括弧に入れておくことにする。

さて、私たちは、この信仰をただ単に知識として頭で受け取るだけでなく、人間全体で受け取る(精確には、ペルソナが最終的受容主体である)。そして、人間全体とは、今ここにいるこの私という孤立した個体を指すだけでなく、誕生の始めから、歴史、文化、社会など様々な要因を経て、今ここに、いわば集積している複雑な複合体全体を指すのである。つまり少々大げさに言えば、私という個体は、今までの宇宙の歩みの一つの結晶として今、ここにいるのである。信仰は、この様な複合体のなかに播かれ、徐々に成長していくのであるが、その過程で、正・負様々の影響を蒙らないでは

いられない。この事実を考えると、私たちの信仰それだけを私から切り離して、私に直接関わりのない数学の客観的公式のように抽象的に正統だとか異端だとか、観念的に論じるのは、どれほど不毛であるかが分かるだろう。不毛であるばかりか、しばしば、誤った信仰理解を持つことになりかねない。

言い換えれば、私たちの信仰は、人間の本能の中に深く根を下ろしているものであるから、歪んだ本能からは、正しい信仰の成長は、奇跡でもないかぎり(奇跡は希ではない)、期待できない。何らかの仕方で、例えば性的な次元で、或いは愛情の面で、本能が傷ついている場合には、正しい信仰は、成長し難い。この様なとき、人は益々信仰に頼りがちである。家庭が旨く行かない、精神的、心理的難問を抱え込んでいるとき、宗教や信仰に頼る。そのことは、基本的には正しい。しかし、宗教や信仰は、これらの問題を直ちに自動的に解決する代替的万能薬ではない。人間は、信仰に頼ると同時に、応分の努力を自分でしなければならぬ。この様な自助の努力をしっかりと支えてくれるのが信仰であるはずである。だから、信仰だけに頼って自分の努力を放棄するのではなく、先ず、本能を癒し、人間としてできる限りのことをなす努力をしなければならぬ。信仰に頼るという口実で、結果的に、人間としてなすべき努力を怠る場合が余りにも多く見られる。つまり、信仰が、人間の生長を阻む場合がしばしば起るのである。もう少し具体的に言うと、教会や教団は、救いのための必須の道であるが、現実には、逆説的に人を救いから阻むのである。教会や教団が必須であるだけに、この事実は誠に由由しい事態である。

ここで、正常と異常と言う言葉について一言触れておく必要がある。種子が受け容れ

られるには、二つの場合がある。一つは、種子が播かれてもいないのに、播かれていると錯覚するか、或いは、正しい種子でもないものを本物の種子と見誤る場合である。実際には何もない場合を「幻想」、見誤る場合を「錯覚」と呼ぶことにする。もう一つの場合は、正しい種子が播かれたときである。これを「真実」と呼んでおく。「幻想」、「錯覚」、「真実」の区別は、理論的にははっきりしているが、実際には、幻想なのか、錯覚なのか、或いは、真実なのか、最初からだれでもが納得できる仕方で、決めることは非常に難しい。この解決のために、ここで信仰を持ち出して信仰は「真実」、そうでない場合は、幻想か錯覚だと決めつけるのは、堂々巡りとなるだけで問題の解決とはならない。従って、それぞれの場合を丹念に検証して、結果的に決める他はない。

さて、理屈の上では、真実の場合は、「正常」、幻想や錯覚の場合は、「異常」と決めればいいわけだが、宗教・信仰に関しては、実際上その様に簡単には行かない。宗教・信仰が目指しているのは、客観的・科学的真理の探究だけではなく、むしろ、主体的な救い、幸せの実現が主旨である限り、偶発的ではあるが、上述のように真実が救いの妨げとなったり、逆に幻想によって人が幸せになると言うことが全くありえないことではない。それ故、もう少し別の観点から正常、異常を考えなければならぬ。その場合も、理論的に正常、異常を断定するのは簡単であるとしても、実際に具体的なケースで、正常・異常の線引きをすることは、それほど容易ではない。小論で言う正常、異常は、白・黒のように判然と分けられるのではなく、或る目安を起点に相対的な位置で決まるものである。従って、限りなく正常に近いが、限りなく異常に近い、つまりだれでも百パ

ーセント正常、百パーセント異常と言うことはないと言った方が正確であろう。例えば、「人間および社会の全体的な完成」と言う、幾分抽象的な目標を目安とすると、この完成に近づけば近いほど、正常であり、逆は異常である、ということになる。この際、完成は、全体的でなければならない。つまり、体と靈魂、社会環境、過去現在未来、全体の完成が考えられねばならない。

以上の意味では、天父の播かれる種子は、そのものとしては、すべて真実であり、正常である。しかし、受け取る吾々の側から異常な結果が発生する。しかも、幻想若しくは錯覚だけが異常なのではなく、真実の場合にも異常があり得る。また、逆に、幻想・錯覚であっても、もし、上の目安に近づけるなら、正常ということができよう。事実この様な場合が多いことも現実である。人間は、幻想によっても完成され得るからである。このことは、すでに触れたように、逆に真実が人間を目安から遠ざける可能性のあることをも示唆するものである。

### 信仰と理性(神学)

一般に、信仰と理性は、矛盾するものではないが、信仰は、理性を越える。或いは、もっと広くいえば、信仰は、理性の次元とは違った次元、たとえば感性・意志をも含む非理性の次元に属する(くれぐれも反理性ではない)。このことは、内容を抜きにして構造だけをとり上げれば、あらゆる宗教にほぼ妥当する。それ故、信仰は、最終的には、分かった、知った、と言えないものであって、分からないまま、知らないままに、受け容れるか、拒むかのどちらかでしかあり得ない。従って、信仰を論証することは、原理的に不可能である。論証され、理解されたものは、信仰(の対象)ではなく知識で

ある。だから、一般に、現実の現象として、或る信仰が、正常であるか、異常であるか、正しいか、誤っているかなどと論議することは不可能であり、不毛である。論議が可能なのは、理性の領域においてだけである。「鯛の頭が神である」と信じるのが正か偽か、それ自体では意味の無い論議である。それ故、既成宗教が無条件に正しく、新興宗教が無条件に間違っている、と言うような議論も、「信仰告白」ではあり得ても、学問的には無意味である。

これに対して、理性は、少なくとも原理的には、万人に共通の能力である。理性の場では、論証が可能であるばかりではなく、論証されたものだけを受け容れなければならない。感性、人情、権威などは、理性の根拠であってはならない。但し、これらは、論証の補助手段として用いることは許される。ところで、神学(教学・宗学)は、学である限りにおいて、理性の領域に属するものである。従って、神学は、正しく論証されたものだけを受け容れ、論証されないものは、拒絶するか、他の次元に譲らなければならない。

それでは、宗教や信仰については一切、客観的な論議はできないのであろうか。ここで信仰への導入という考えを持ち出す必要がある。

### 信仰と信仰への導入

上述のように、信仰と理性は、次元が異なるが、同一の人間の内にいるものだから勿論互いに無関係に孤立しているのではなく、密接に関わり合っているし、また、それ故、互いに深い影響を及ぼしあっている。従って、どのような宗教についても、その信仰そのものの正常・異常を論じるのは、事実として無意味であるが、信仰と理性のいわば境界領域については、ある程度の議論は、可能である。境界領

域という言い方は、少し漠然としているが、信仰も理性も同一の人間主体に関わるものであるから、或ることを信じるのは蓋然性がある、少なくとも理性に矛盾するものではないことを論理的に納得することができる、若しくはできない。この様な信仰に間接的に関わる、いわば信仰の裾野とでも言うべき領域を境界領域と呼ぶ。そしてこの領域は、かなり広範である。例えば、アブラハムが、イサクを生贄としてヤハウェに献げるのがヤハウェの御旨だと信じたとき、その信仰の正否を客観的に論じても意味はないが、実際にイサクを殺そうとしたことが客観的に妥当であったかどうかは、議論の対象となり得る。人を解脱させてやるためには、一刻も早くこの世から解放することだと信じるのは、問題ないとして、その信仰を具体的な現実の世界で実現させるのは、全く別の問題である。例えば、人を救うためにサリンを散布するのは、その正否を大いに論じなければならない。そして、その結論から、信仰が異常であると間接的に判断するのは、当然のことであろう。仮にこのような境界領域を「信仰への導入」と言い換えれば、この導入に関しては、客観的な正・否の判断が可能であるし、それ故、判断しなければならない。この観点から或る宗教・信仰を識別するのは、絶対的ではないにしても、非常に妥当である。それ故、宗教、信仰における正常と異常について論じることに意味があるのは、この信仰への導入の領域においてである。例えば、カトリックの信仰と或る新・新宗教の信仰と、どちらが正しいか、と言う問は、無意味、不毛であり、結局は水掛け論に終わる。しかし、カトリックの信仰に基づく具体的生活(信仰への導入)とこの新・新宗教の信仰に基づく具体的生活を比べることに意味がある。だれが見ても明らかな基準に従っ

て、判断することが可能だからである。勿論、この判断を受け容れるかどうかは、別の問題である。だから、この導入の領域に関しては大いに議論し、対話を行わねばならない。

最近の自称麻原被告の裁判についても同様である。裁判は、人々の救済のために「ポア」をした、と言う被告の信仰内容を裁く権利も能力もない。しかし、経験の世界で実行された「ポア」が、刑法その他に触れるのかどうか判断する義務と権利を当然裁判は、帯びている。勿論「ポア信仰」は、被告の行為の状況ではあろうが、行為そのものの（厳密には結果の）「本質」を構成するものではない。つまり行為の十全さに影響を及ぼし、実定法に対する責任の軽重を左右することがあるとしても、決して責任を免ずるものではない。

さて、現実の問題として吾々に密接な関わりのあるのは、実は、上述のこの信仰への導入の領域である。吾々自らの体験を振り返ってみても、具体的な信仰生活は、三位一体とか、聖マリアの処女性とか、教皇の首位権などを巡って営まれているというよりも、コンタツとか、メダイとか、お水とか、お数珠とか、南無阿弥陀仏とかの感覚に触れる物を通して安心立命を求めている。臨終の時には、神学大全やお経の講義よりも愛する人に手を握られて帰天したいというのが大方の願望であろう。実は、現代の宗教の問題は、この信仰への導入の領域の問題であって、既に述べたように、この領域では、理性の介入が可能であり、また、介入すべきである。

## 信仰と宗教

一般に宗教と信仰とは、あまり区別しないで互換的に用いられているが、厳密には、分離はできないが、区別することはでき、また区別し

なければならない。これは、偽りの宗教だけでなく、正しいと信じている宗教についても言える。正しい誠実な宗教は、正しい信仰を生きていくはずであるから、敢えて信仰と宗教を区別するのは、妥当ではないようだが、少なくとも両者は、同一ではなく、区別は、可能である。ここで、宗教とは、信仰若しくは、信仰体験を中核に、いわばその周りに心理的、社会的、文化的システム、組織などを包含するものである。従って、宗教には、信仰と同質の要因と異質の要因とが含まれていることになる。これらの要因は互いに深く絡み合っているから、単純に、前者を宗教の本質、後者を単なる付け足しの飾りであると割り切るわけには行かない。

異質な要因に注目するならば、宗教は、時に、信仰と対立するだけでなく、既に述べたように、信仰を阻害することもある。確かに、システムや制度や組織は、本質的に悪ではない。むしろ、信仰を支え、育てる役割がある。荘大な大聖堂、整然としたヒエラルキア、荘厳な典礼、などが吾々の信仰を強め、深めるのは言うまでもない。しかし、同時に、制度や組織は、それ自身の論理を持っている。つまり、それ自身極めて必要である組織の自己保存のために、信仰を犠牲にすることもあり得る。イエスは、律法は人間のためで、人間は律法のためではない、との趣旨のことを言われたが、まさにこの現実を指して居られるのではないだろうか。一般に、宗教が制度として肥大化すればするほど、この問題が深刻になることを直視しなければならない。今、所謂既成宗教がその有効性を問われているのは、まさにこのためである。

## 宗教と憑依現象

(マインド・コントロール)

最後に、宗教と憑依現象に関して、触れて

おく。宗教学では、憑依現象について様々な観点から、「定義」が試みられている。ここでは、厳密な定義を離れて、非常に広い柔軟な意味で受け取りたい。そして、思索神学の立場から、この問題について或る程度の解明を試みよう。

私見では、最も広い意味での憑依現象の、少なくともその素地は、人間本性そのものの内にある。即ち、人間は、孤立独行の存在ではなく、様々な次元で、様々な仕方で、多くの他者から影響されながら生きている。つまり、内外からの刺激に絶えず反応しながら生きている。通常これらの他者・刺激は、即物的に直接に影響を及ぼすのではなく、人間の知覚能力(知性・感性・意志)を介して働きかける。例えば、吾々は、何かを知らねば行動することはできない。知ると言うことは、或る対象によって規定されることである。つまり自己以外のものによってコントロールされることである。勿論、吾々は、これをマインド・コントロールとは言わない。

しかし、基本的に精神が規制されていることに変わりはない。そして、この規制は、或る場合には、意志の自由を多少とも拘束するまでに、或る場合には、意志の自由を活性化、高揚する仕方で、影響を及ぼす。前者の例は、強迫観念、後者の例は、聖霊の賜物などが考えられる。いずれにしても両者は、他からの影響という点で通底している。宗教学で言う憑依現象は、前者に近く、意志の自由が殆ど失われるまでに影響される場合である。

しかし、後者の場合も、現象だけを見れば、憑依と言っても大きな間違いではないだろう。流行のマインド・コントロールも、この意味で憑依現象の一種とってよいだろう。極論すれば、人間の本性は、上述のような広い意味での憑依なしには、生きていけない。問題は、ど

の様にして意志の自由を守り抜くか、である。原則として、対象は、意志の自由を多少制約する。人間の意志の自由を損なわず、かえって、自由を完成する「対象」は、イエスの霊、聖霊のみである。それ故、吾々は、努めて聖霊による憑依をこそ求めるべきである。聖霊による憑依だけが、人間の自由を低減しないばかりか、かえって、人間の自由を高め、完成する。ちなみに、キリスト者とは、本来、聖霊に憑かれた者であると言えよう。

とにかく、上述の広い意味での憑依現象は、いわば通常の現象であるが、それが、誰か(個人、集団、教団、教会など)によって意図的に操作される場合、問題は一層深刻となる。但し、操作は必ずしも悪いことではない。操作そのものの善悪は、別の基準から判断しなければならない。例えば、イグナチオの「霊操」は、非常に強度に操作された憑依現象を目指しているとも言えそうだが、聖霊の働きにすべてを委ねることを目指すかぎり、原則として正しい修行である。

しかし、大抵の場合、操作は、容易に逸脱する危険がある。しかも、善意による、神のために、宗団のためにとの大義の下に、結果的に逸脱する危険がある。ここから、所謂、導師、指導者がどれほど必要かが分かる。指導者とは、管理したり、引率したり、支配する人ではなく、正しい目的、方向を指し示し、必要ならば軌道修正を助言する人である。現在のカトリック教会の信仰生活に欠けていると思われるのは、適格なグル(導師)ではなかろうか。蛇足を加えるなら、グル・指導者は、若し、いずれかを選ばねばならないのなら、聖人よりも、賢明慎重な判断力を持つ人の方が望ましい。

## むすび

### 宗教の異常に対する若干の指針

バチカン第二公会議以降、カトリック教会は、他宗教に対して寛大な態度を採り、積極的に対話を進めているが、原則として諸宗教との対話は、相互信頼の上に行われるべきである。場合によっては、互いに自己改革を行わねばならないが、そのような場合も、相互の尊敬、愛、信頼関係は、継続しなければならない。即ち、この様な自己改革のために、互いの宗教の間の関係・信徒間の人間関係が崩壊しないような状況の下に対話がなされねばならない。目には目を、歯には歯をと言ったような好戦的な態度は、厳に慎まねばならないであろう。

以上のことが成り立つには、現実の問題として、すべての宗教には、いわゆる「阿片」としての要因が含まれていることを認めた上で、それにもかかわらず、全体として、正しく、誠実な宗教と、そうでない不実の宗教があることを認めねばならない。不実の宗教とは、そのメンバーが不徳であるだけでなく(全ての宗教には不徳な人がいる)或る宗教そのものが人間の全体的幸せではなく、何らかの個別的な善(金銭、権力、名声等)を目的とし、若しくは一部の人々の利益のために活動している宗教、人々の誠意を悪用、もしくは、曲用しているのではないかと疑われる宗教、宗教の自由、良心の自由、人間の自由などを十分に尊重しないで、個人の意志に反して強制的に入信させる宗教、絶えず自己を反省し、自己批判・自己改革に努めない宗教、などである。対話を行うには、この様な問題点を先ず念頭に置かねばならない。本当の意味での宗教対話は、この様な不実の宗教との間では原則的に成立しない。それは、宗教の本質そのものを破

壊するからである。それゆえ、このような宗教とは、最初から、対話に入るべきではないのは言うまでもない。

一般の信徒にとって、具体的に、或る宗教が、対話に値する宗教であるかどうかを見定めるのは、その宗教についての可なりの専門的な知識が必要であるから、事実上至難である。従って、対話は、誰にも無条件に勧めるべきではない。特に個人的な恣意からなすべきではない。カトリック教会では、この様な対話の実践に最終的な責任を負うのは、教区においては、その教区の司教(教区長)である。しかし通常の場合、司教が、現場の責任ある人々に具体的な処置を委託し、また、人びとの勧告にしたがって、一般的な指針を示すのは、正常な方法である。但し、このことは、責任者や指針に盲従しなければならないというのではなく、最終的にはそれらに信頼しながら、積極的、能動的に対話に関わっていくべきである。

不実の宗教に対する積極的な対策としては、ただ次の一点に尽きるであろう。即ち、吾々自身が、イエスの福音を誠心誠意生きることである。何故なら、人間は、信仰なしに生きていけないからである。福音を生きるとは、教会の制度や施設を充実させたり、単に教会の規則を守ると言うことだけではなく、むしろ、福音の精神に生かされた、一人一人を親身に尊重する人間共同体を作り上げることである。この場合、特に二点に注意する必要がある。先ず、吾々が、この共同体(教会)に参加する場合、専らこの共同体に何かを求めるのではなく、逆に何かを積極的に寄与すると言う態度でなければならない。次に、何かを寄与する際、受け取る人(々)が本当に願望しているものだけを、願望している仕方、捧げることで

ある。押し付けられた善は、むしろ悪となる。

5. 最後に吾々は、あらゆる所に——不実の宗教においてさえ——働いて居られる聖霊の全能の力に深い信仰と信頼を常に抱くべきである。聖霊は、すべての人の人間としての自由を尊重しながら、最終的には、ご自分の愛の計画を成就される。この愛に祈りをもって協

力する事こそすべてのキリスト者に課せられた名誉ある召命であろう。

いしわき・よしふさ

本学文学部教授・本研究所第二種研究所員